



プログラムの立て方

1 「プログラム」とは

■ 「経験」と「体験」と「体験活動」とは？

独立行政法人国立青少年教育振興機構（以下「機構」という。）は、「体験を多く行っている青少年ほど、他者への思いやりや積極性などの自立的行動習慣が身につけており、自己肯定感も高い傾向にある」という調査結果を報告しています（平成22年度「青少年の体験活動等と自立に関する実態調査」報告書〔概要〕）。

また、学習指導要領では、「道徳教育を進めるに当たっては、(略) 集団宿泊活動やボランティア活動、自然体験活動などの豊かな体験を通して児童の内面に根ざした道徳性の育成が図られるよう配慮しなければならない」（「小学校学習指導要領」第1章総則第1教育課程編成の一般方針）と提示され、学校教育法では、「学校内外における自然体験活動を促進し、生命及び自然を尊重する精神並びに環境保全に寄与する態度を養うこと」（第21条）と規定されています。

では、「体験」と「体験活動」は、どのように違うのでしょうか。法律上の定義はありませんが、平成19年中央教育審議会答申「次代を担う自立した青少年の育成に向けて」では、次のように説明しています。

— 体験活動に関する調査研究成果 —

機構のホームページには、様々な調査研究の成果が掲載されています。

http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/

・ 経 験 ・

人間が実際に見たり、聞いたり、行ったりすることを広く指して用いている。

・ 体 験 ・

経験のうち、経験する者の能動性や経験の内容の具体性に着目して、能動的な経験や具体的な経験を指して用いている。

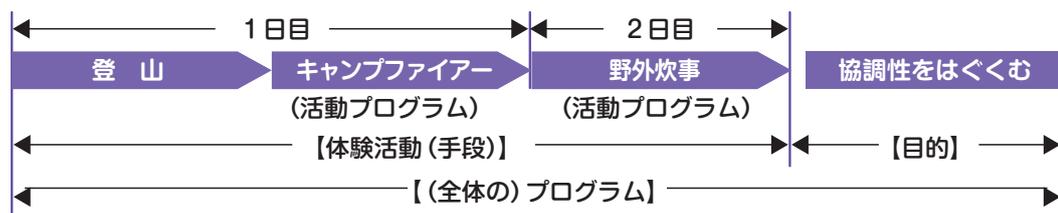
・ 体験活動 ・

体験を通じて何らかの学習が行われることを目的として、体験する者に対して意図的・計画的に提供される体験を指して用いている。

■ 「プログラム」とは？

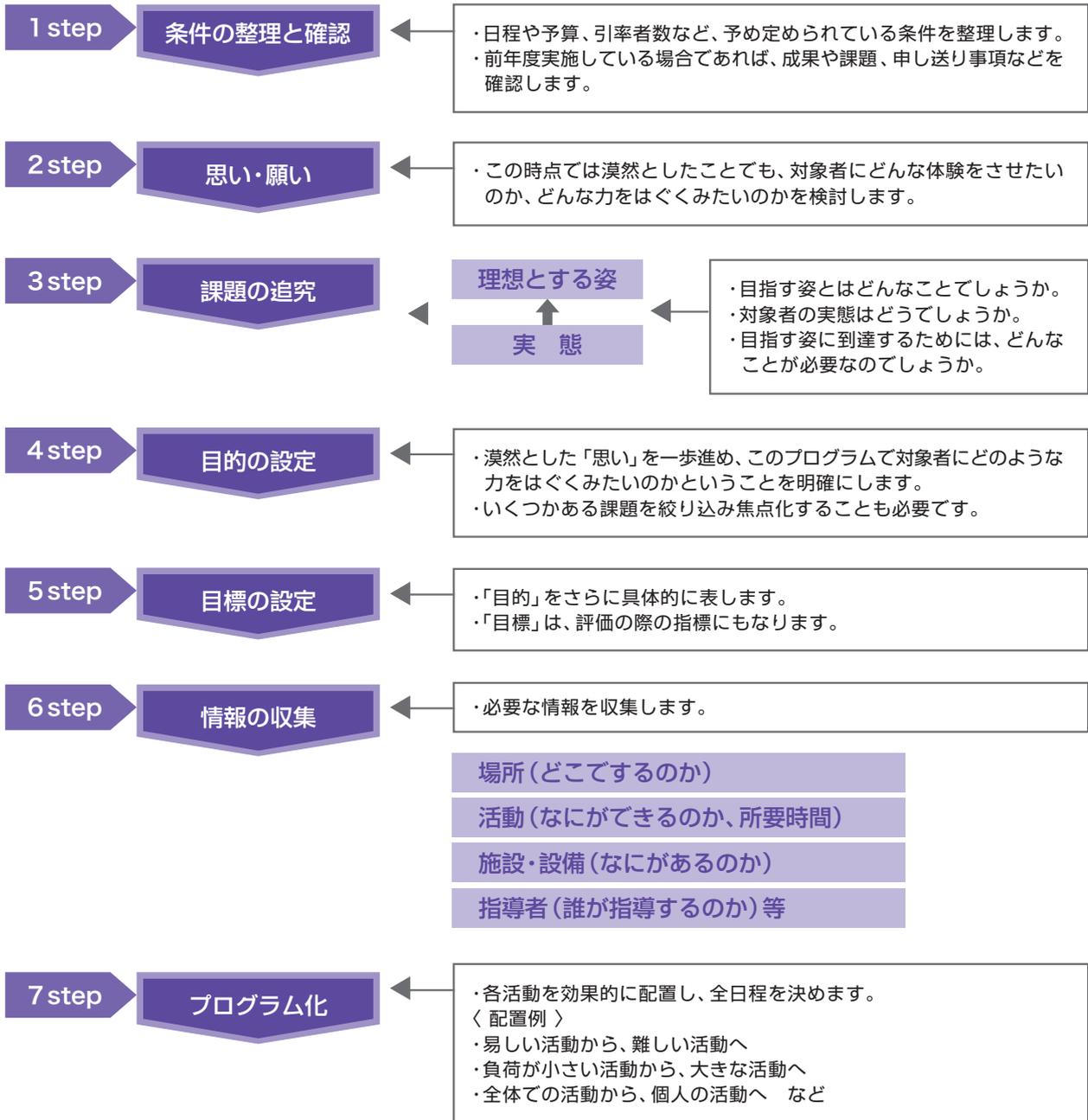
プログラムとは、「学習（教育）目的を達成するための全体またはその中の1つの活動」を指していいいます。この場合、全体のプログラムと区別して、1つの体験活動を活動プログラム（アクティビティ）と呼ぶことがあります。

学習の目的を達成するためには、1つの体験活動を提供すればよい場合と、複数の体験活動を組み合わせる場合があります。複数の場合は、目的を達成するために、その活動プログラム（アクティビティ）をどの順番で提供するか（より効果的な組み合わせ）を考えることが大切になります。



2 プログラム立案の手順

プログラムを立てる手順の一例を紹介します。



— プログラム相談 —

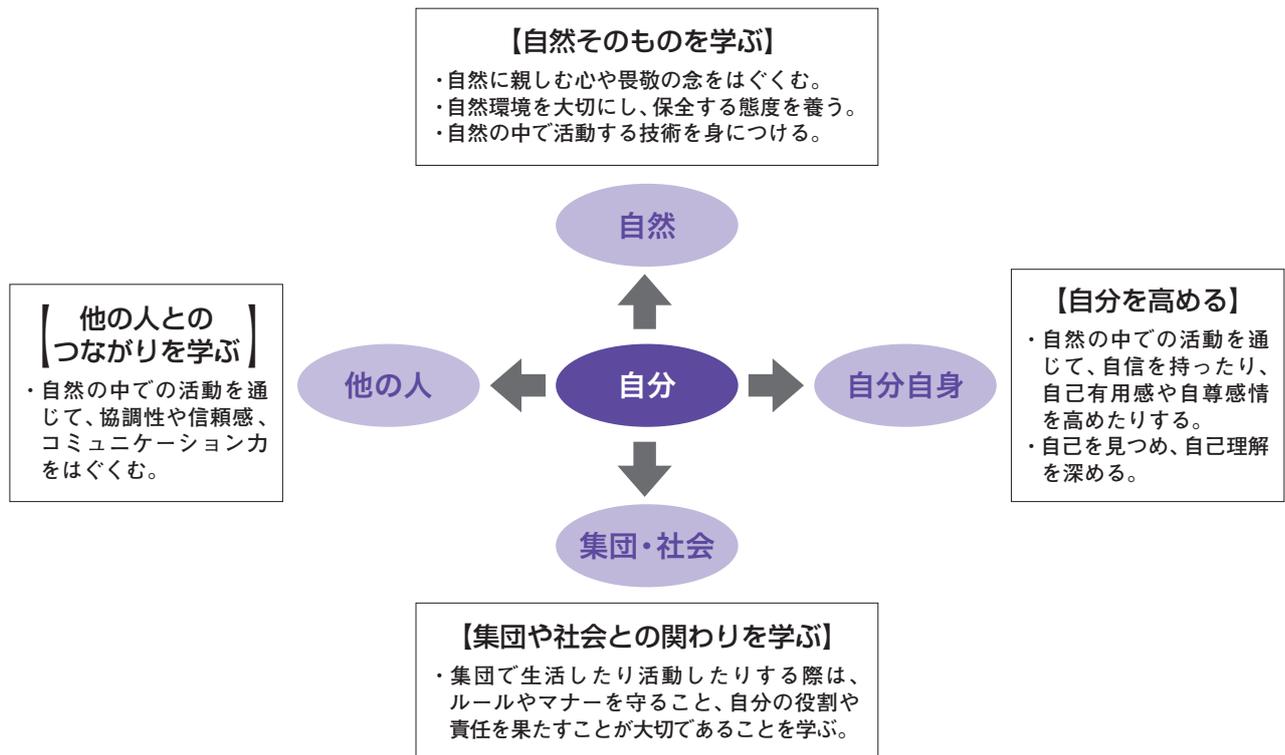
中央交流の家では、活動内容や指導者などの情報を提供し、プログラム立案のお手伝いをさせていただきます。電話でもご相談に応じますが、ご来所いただいた上での打合せをお勧めします。

3 プログラム立案のポイント

■ 「目的」の設定

「体験活動」の「目的」をどのように設定すればよいのでしょうか。例えば、自然体験活動の場合、「自然に親しむ」といった自然そのものに関する目的もあれば、「自然体験活動（例えば、「登山」）を通じて、協調性をはぐくむ」といったことも考えられます。

次に提示するのは、「小学校学習指導要領『道徳』の[内容]」を参考に作成した、自然体験活動における目的設定の視点と目的の例です。



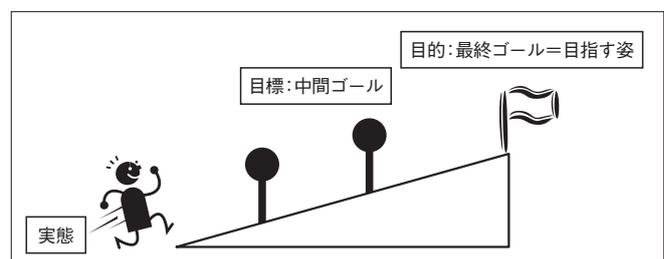
■ 「目的」の具現化＝「目標」の設定

「目的」とは最終的に目指す姿です。例えば、学校の集団宿泊活動の場合、「協調性や信頼感をはぐくみ学級の連帯感を高める」といった概念的・抽象的な表現となります。

では、「連帯感が高い学級」とはどのような学級なのでしょう。また、協調性や信頼感が身につけている子どもたちには、どんな言葉や行動が見られるのでしょうか。例えば、これまでは、学級に対して無関心の子が多かったとしたら、「挨拶ができるようになる」、「困っている人を助けるようになる」といった言動がとれるようになることが考えられます。

このように「目的」を具体的に表したものを「目標」とします。「目的」が最終ゴール(理想とする姿)ならば、「目標」は中間ゴールといえるでしょう。

また、「目標」は、具体的に表現されているので、到達の度合いが測定しやすいことから、「評価」の際の指標にもなります。

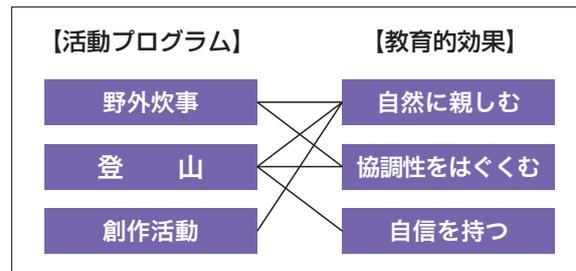


■ 「内容」(活動プログラム)の選択

「登山」「野外炊事」「ネイチャークラフト」など、一つ一つの活動をプログラムと区別して、「活動プログラム」と呼んでいます(「アクティビティ」ともいいます)。

それぞれの活動プログラムには、特有の教育的効果があります。例えば、「野外炊事」には、①「自然の中で食事を作って食べる楽しさを味わうことができる」や、②「薪割り、火熾し、調理、片付けなどを行うことにより協調性をはぐくむことができる」といった教育効果(言い換えれば、前述の「目的」ということです)が考えられます。

こうした教育効果を踏まえ、「目的」「目標」に合わせて、「活動プログラム」を選択します。



■ 「目的」「目標」に応じた「指導方法」の選択

子どもたちは、「遊び」を通じて様々なことを学び育っていくといわれています。「体験」も「遊び」と同様の意味があります。

しかし、前述のとおり「体験活動」は、「何らかの学習が行われることを目的とした体験」または「体験する者に対して意図的、計画的に提供される体験」ですから、偶発的な学習だけに依存することはできません。「何をするのか」といった活動内容とともに、「どうやってするのか」といった指導方法も併せて考えることが必要です。

例えば、「野外炊事」の場合、前述の①を目的とした場合と、②を目的とした場合とでは、どのような指導方法の違いがあるのでしょうか。

子どもたちがうまく作業や調理ができなかった場合、①であれば指導者は手助けして作業を代わることは構いませんが、②であれば、作業を安易に手伝うことはしません。子どもたちが自ら考え話し合う中で、問題を解決するように支援します。この問題解決にいたる過程(プロセス)が学びになると考えます。

もちろん、どちらの場合でも、薪の割り方や調理の仕方といった技術的な指導、そして、安全指導は共通して行わなければなりません。

指導方法については、「小学校学習指導要領『特別活動第3指導計画の作成と内容の取扱い[学校行事]』」でも提示されています。

また、実施に当たっては、(略)自然体験や社会体験などの体験活動を充実するとともに、体験活動を通して気付いたことなどを振り返り、まとめたり、発表し合ったりするなどの活動を充実するよう工夫すること。 (下線は筆者)

つまり、活動の後に、「振り返り」という内省・省察の時間を設けるとより効果的です。自分で考えたり書いたり、あるいは、グループで話し合ってまとめたりします。また、各人の考えやグループの意見を学級全体(グループ全体)で発表することにより、他の人の気づきや考えを知ることができます。

体験を通して気づいたことを言葉で表わすことにより一般化・概念化することができ、経験知として定着していくのです。

このような活動は、学習指導要領が重要としている「言語活動の充実」につながります。